

新年あけまして

おめでとうございます

令和5年の新年があけました。

皆様にはお元気で新年をお迎えのこととお慶



び申し上げます。

最近3年間は、新型コロナウイルスの感染拡大で、通常の行事等が制限されるとい

う残念なことになっていました。昨年後半からは、この制限も次第に緩和されてはきましたが、まだまだ感染者が増加して油断のならない状況です。

稲むらの火の館も、来館者が減少してたいへん寂しい状態が続いていました。そんな中で、昨年秋頃からは、かなり戻って参りました。

昨年7月には「濱口梧陵翁」の胸像も建立され、周辺整備事業も完了して、観光バスの駐車場も完備され、うれしい限りです。

「濱口梧陵国際賞」の受賞者も3年ぶりに来館され、見学や交流が実現しました。また、「稲むらの火祭り」も規模を縮小したとはいえ、再開されました。平常開催が待ちどおしいものです。

明るい話題では、「上皇后陛下一米寿をお迎えになって一」というDVDに、平成27年に来館された時の映像が挿入されていました。

阪急交通社が「たびコト塾」というキャンペーンで、講談「濱口梧陵物語」を制作され、講談師の旭堂南龍さんが公演されました。作者は、落語家の桂紋四郎さんで、取材にも来館されました。梅田の阪急グランドビルで公演されましたが、期間限定とはいえ、オンラインでもアーカイブとして流されました。一昨年、浪曲師の菊地まどかさんに、稲むらの火の館応援大使を委嘱しましたが、日本の古典芸能の分野でも取り上げていただき、「稲むらの火と濱口梧陵翁」が幅広く周知されたのも、更にうれしい話題です。

第19回稲むらの火講座の開催！！

稲むらの火講座は、今回で第19回目となり、下記のとおり開催いたします。

日時 令和5年3月4日午後1時30分から
場所 稲むらの火の館3階ガイダンスルーム
講師 城下英行先生(関西大学社会安全研究科・社会安全学部准教授)
演題 防災の学びには何が必要か
——良い実践をどのように活かすのか



<講師紹介>城下先生の専門分野は、防災教育、防災学習論。知識・技術の一方の伝達という防災教育観の問題点について防災と学びの両側

面から検討し、そうした防災教育観をも包摂する、より拡大された防災教育のあり方について模索しています。現在は本物の防災活動に参加することそのものを防災のまなびと捉え、そうしたまなびの機会へのアクセスの提供が防災教育であるという立場に立ち、大阪府や和歌山県をフィールドに実践的な研究に取り組んでいます。

以上のような研究活動をされています。これまでも、指導されている学生を連れて、稲むらの火の館へも何回か来られています。

新型コロナの感染も、まだまだ完全に終息したとは言えません。感染拡大を防ぐ対策をしながら開催いたします。そのため、今回も定員60名といたします。また、開催についてご連絡しなければならない可能性もありますので、参加申し込みは必ずお願いします。

電話0737-64-1760、ファックス番号64-1761です。どちらでも結構です。

百世安堵

関西大学社会安全学部 近藤誠司

第22回 明るい無常感

日本人の心性を「無常」という言葉で説明している人によく出会う。世の中は移ろいやすいもの、人の世はかくもはかない。祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり…。四季がめぐり、さらに、災害が常態化した風土においては、永遠なるものを想起するよりも、刹那を愛でる感性のほうが磨かれやすいのかもしれない。

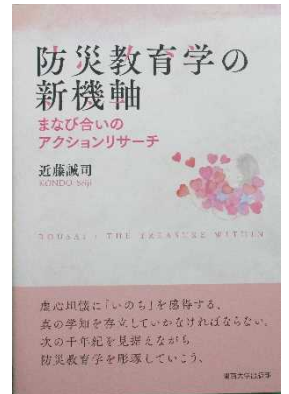
しかしここには、二重の意味において「落とし穴」がある。一つ目。無常の感覚を丹田に据えた人々は、防災のような、自然の摂理に逆らうかのごとく営みは、浅はかなものとして斥けがちである。智者のふるまいは泰然自若こそ潔し。諦観の境地を範とせよ。こうなると、リスクに対抗して予防行動をとることなんて、小賢しく見えてしまう。だから結局、何もしない。ひるがえってみれば、それこそ「刹那主義」の極地である。取り組みをしなければ、ゼロはゼロなのだから。

もう一つの「落とし穴」。これは、だれが無常を唱えているのかを注意深く見れば、腑に落ちる。東日本大震災が起きて、人々が津波にさらわれ、原子力発電所が爆発し、人々がふるさとを追われたとき、「無常」という言葉を殊更に使用していたのは、被災当事者などではなく、評論家やジャーナリスト、為政者たちであった。巨大災害の襲来は、無常の証左。だから、「仕方がない」、「想定外だ」、「われわれの責任ではない」…。それこそ「無責任体制」の極地ではあるまいか。

そこで、宗教学者の山折哲雄先生が提唱した「明るい無常感」というコンセプトを取り戻そう。打ちのめされたその先に、きっと平穏な暮らしが待っている。だから、絶望の淵から、一歩でも半歩でも前に進んでみよう。謙虚な民に力を与えてくれる言霊。これこそが「明るい無常感」である。江戸安政の混乱を生き抜いた濱口梧陵も、きっと合点してくださるはずだ。

【書籍いただきました】

本紙へ「百世安堵」のコーナーを連載してくれています関西大学社会安全学部教授の近藤誠司先生が「防災教育学の新機軸」というご本を出版されました。この程、当館へもご恵贈いただきました



特に、第3章では、近藤先生が主導して行われてきた『「こども梧陵ガイド」プロジェクト』について、この事業の実施にあたっての分析を詳しく書かれています。関西大学近藤ゼミ、龍谷大学石原ゼミの学生さん方の支援を受けて、広小学校6年生が活動したプロジェクトでした。

平成28年(2016)8月に、近畿圏の防災を研究している大学生が稲むらの火の館で次世代防災研究者連盟のサマーセミナーで提案されたことがきっかけで始まったのでした。4年にわたって開催された「こども梧陵ガイド」では、大学の少ない和歌山県の子供達にとって、大学生とふれ合う事も楽しみだったようです。両大学の皆様には感謝しかありません。近藤先生は、こうしたことを学問的に解明されて、分析されています。

『eo 光「原田伸郎のこの街ええなあ」』の番組の収録がありました。12月に、「あのねのね」の原田伸郎さんが、この番組の収録で来館されました。西岡町長のインタビューや、広川町内の名所を撮影して回ったそうです。eo 光での放送だけではなくインターネットで1月4日から放映されスマートフォンでも見ることができます。

<稲むらの火の館の紹介>

濱口梧陵記念館/津波防災教育センター
〒643-0071 住所 和歌山県有田郡広川町広 671
<http://www.town.hirogawa.wakayama.jp/inamuranohi/>
*開館時間：午前10時～午後5時(受付終了4時)
*休館日：月曜日(祝日の場合は翌平日)
(世界津波の日の11月5日は開館)
年末年始(12/29～1/4)
*記念館だけの入場は無料です
*また、6月15日と11月5日は無料です